

つがるの昔っ子（昔話） 2 /

鼓の歌 （標準語）



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト、カラーリング
:やざわ ゆな

昔むかし、一人の歌詠みのお坊さんがいました。
この坊さんは、歌を詠みながら、はるばる旅をして、北国の津軽へ来ました。
南部の盛岡を抜けて、津軽へ入り、次は秋田へ行こうと思って、西へ西へ山路を進んだら、
大きな瀧に出ました。



その瀧は、全てが大きな瀧でした。太鼓のような大きな音で流れ落ちていました。とても見事な瀧を見たので、しばらくそこに居て、それから筆と懐紙を出して、スラスラと一首たしなめました。



それから、しばらく進むと、日が暮れてきました、困ったなあ、どうしたらいいかなあ？と思って歩いていると、向こうに小さな明かりが見えました。

ああ、こんな山奥にも家があるんだ。助かった助かったと思って、早足でその家へ行って、トントンと戸を叩きました。



すると、中からお爺さんが出てきました。
『私は、歌詠みの僧ですが、旅の途中で日が暮れてしまいました。どうか一晩泊めてもらえませんか』と言いました。

爺様『ああ、そうですか。こんな山奥で、なにもおもてなしは出来ないけれど、泊めることはかまいません、さあ、中へ入って』と、坊さんを家に入れました。



その家には、爺様と婆さまと、かわいい女の子の三人が居ました。
山奥の暮らしで、粗末なものを着ている人達でしたが、どこか気品がある家族でした。

爺様『あなたは、どこへ行ってきましたか？』

坊さん『鼓の瀧を見に行っていました』

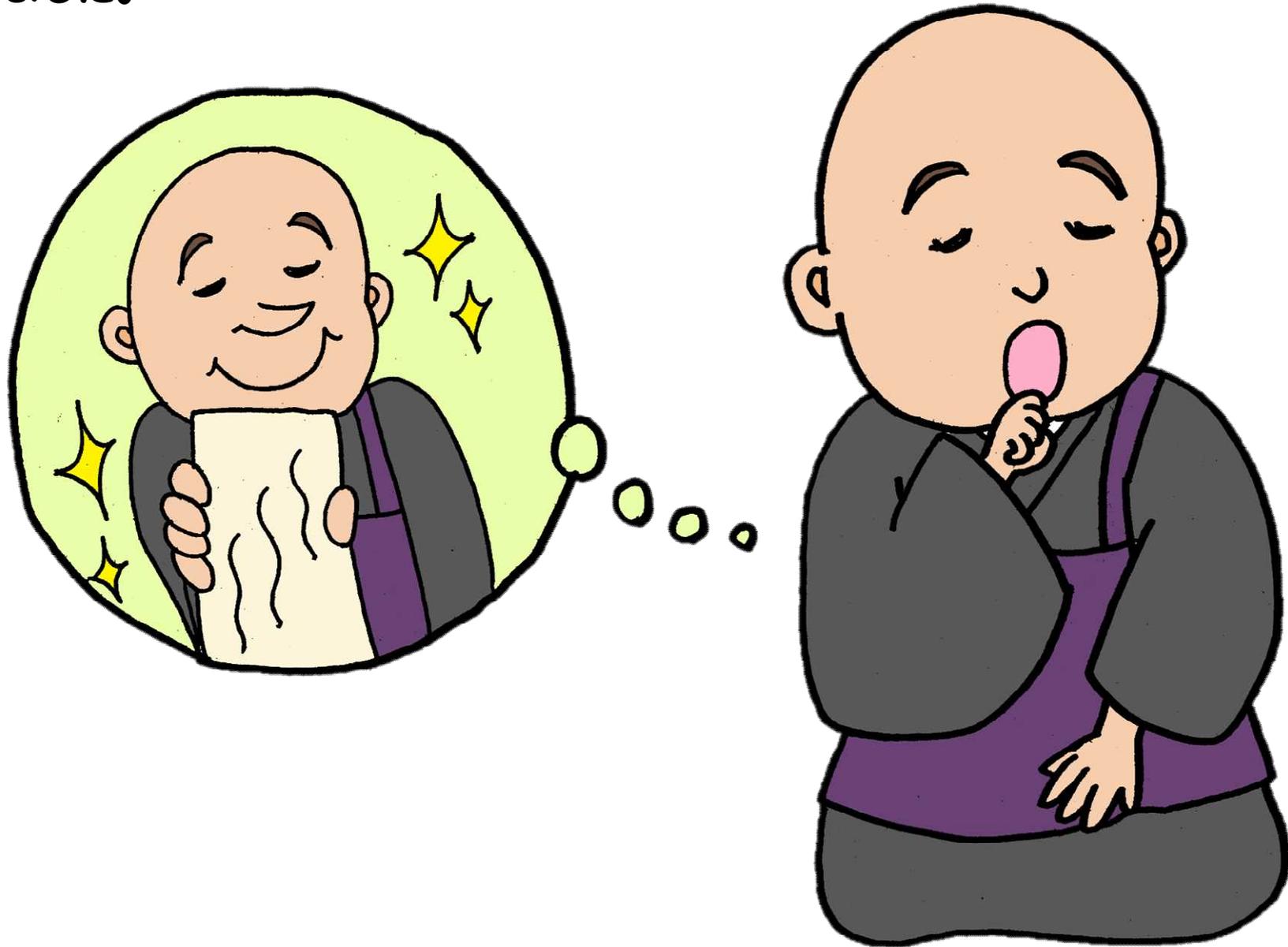
爺様『そうですか。それは山奥で大変でしたね。それで、いい歌を詠むことが出来ましたか』と聞きました。



この歌詠みの坊さん、自分の歌は相当凄いと思っていたもので、『オッホン』と咳払いして、『まあ、一つ出来ました』と言いました。

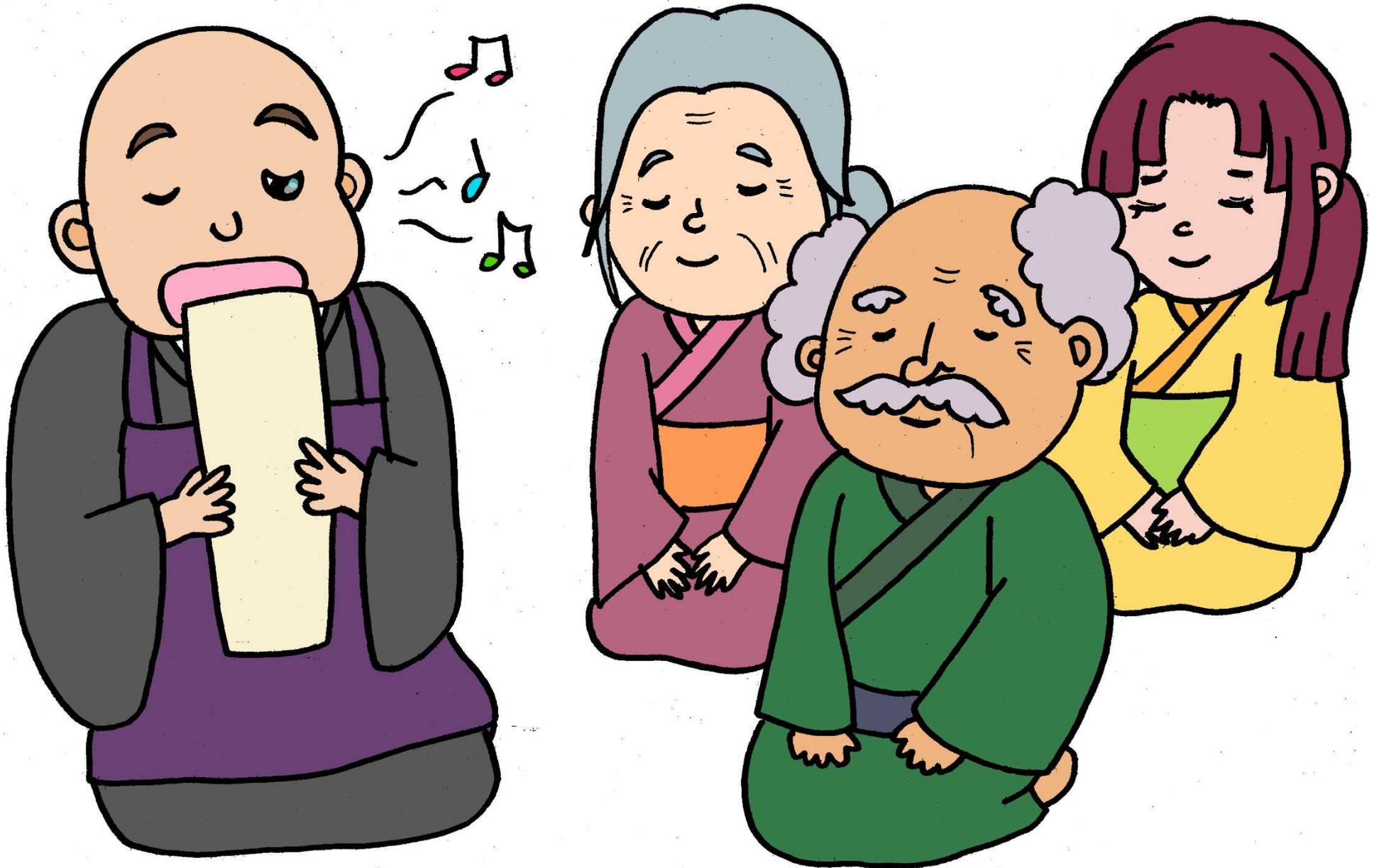
『そうですか。どういう歌ですか？ぜひ聞かせてください』

坊さん『では』と言って、おもむろに懐から懐紙を出して、さっきの瀧で作った歌を詠みました。



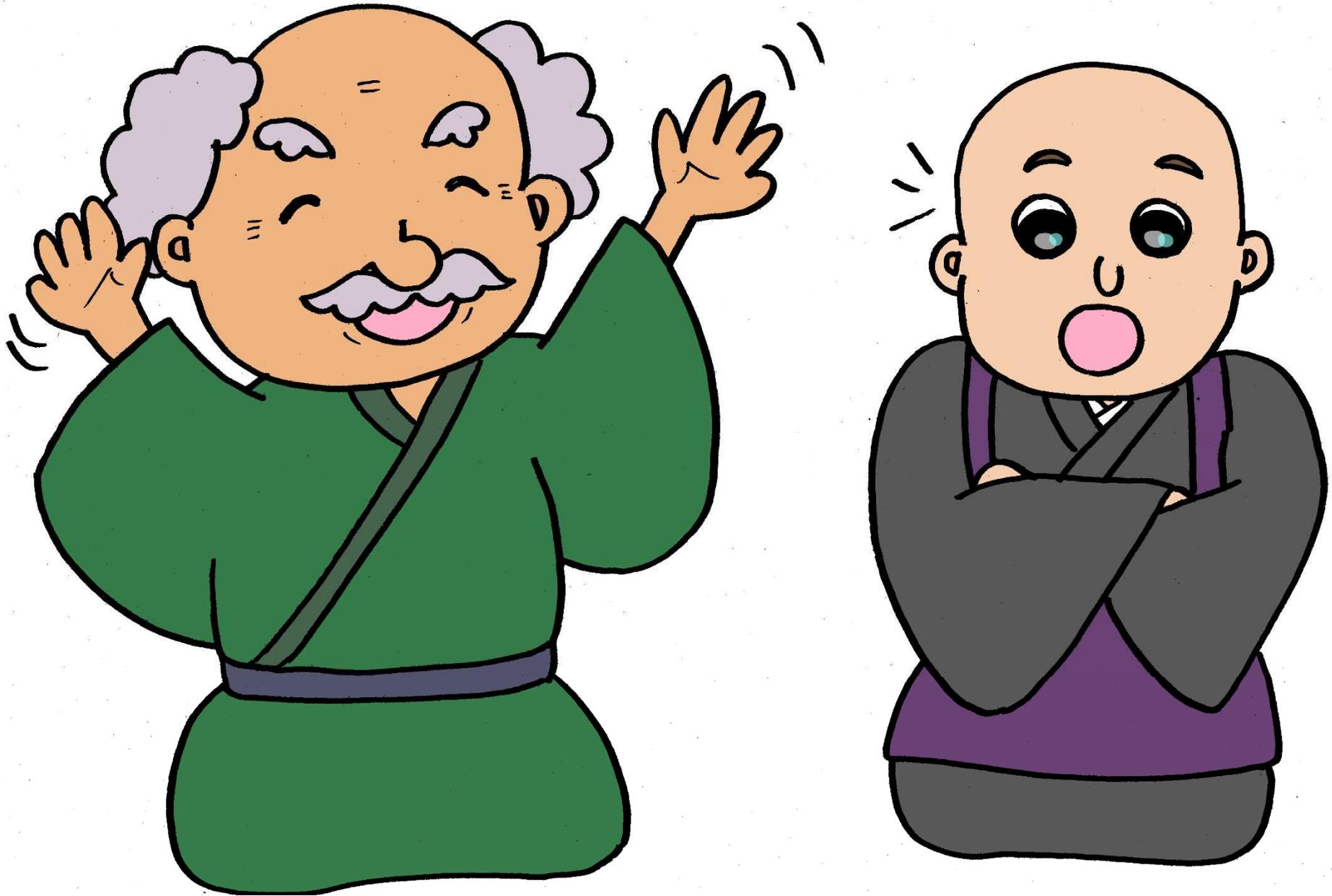
〈伝え聞く鼓の瀧へ来てみれば岸边に匂うタンポポの花〉

『・・・と、まあ、こんなもんです』と言って、心の中では、こんな山奥の年寄りとお嬢に、私の歌を詠んで聞かせても、わかるわけないだろうと思っていました。

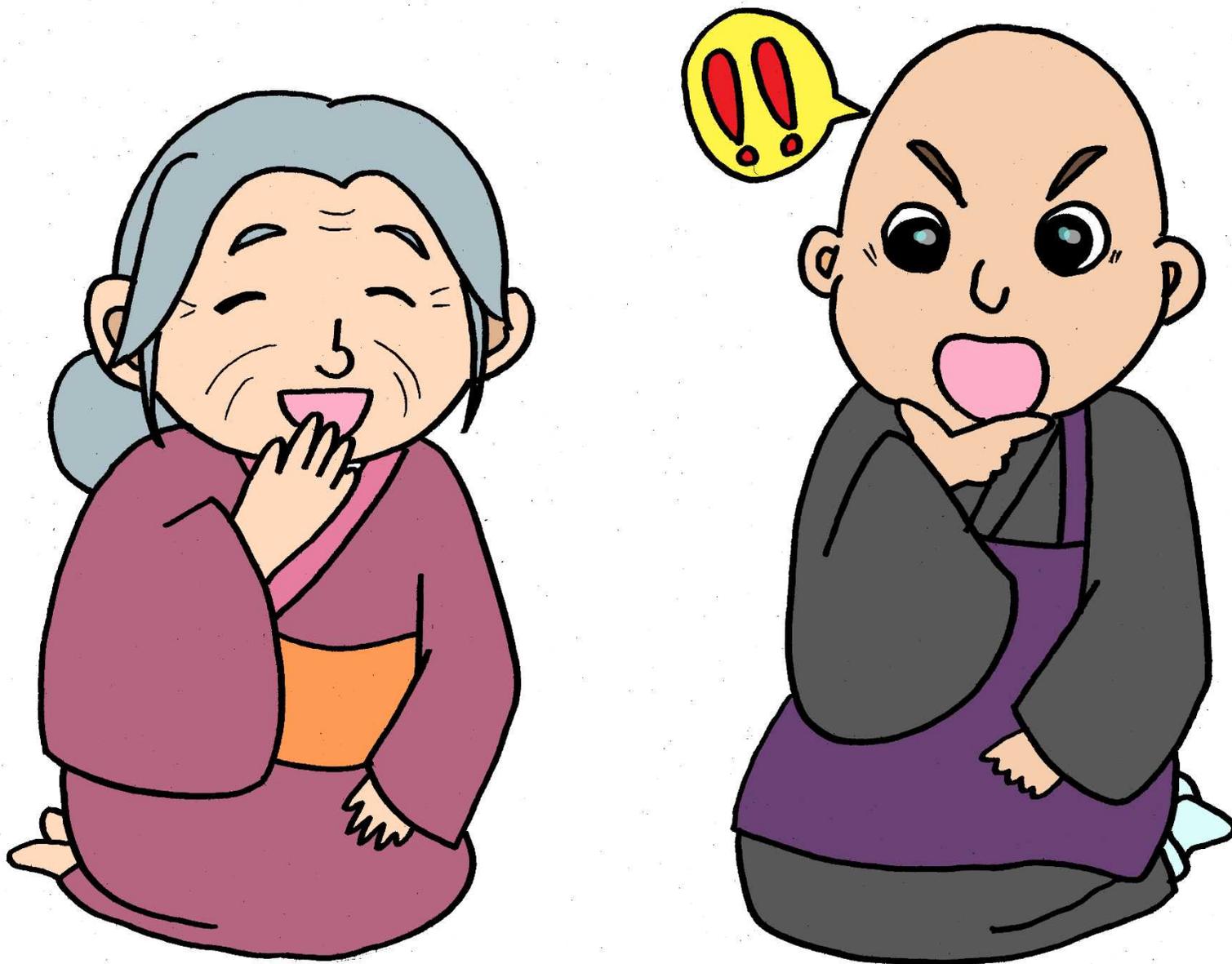


すると、爺様『ああ、なるほど。いい歌ができましたね。だけど、ちょっと直すところがある。
というのは、鼓というのは、音を聞くものだ。

だから、〈伝え聞く〉では面白くない。そこは〈音に聞く〉と直したらどうでしょう』
『ああ、なるほど、そうですか』と直してみたらそっちの方が塩梅がいい。



すると、今度は婆様が『私にも一つ直させてみてください。
〈鼓の瀧へ来てみれば・・・〉ではなくて
〈鼓の瀧を打ちみれば・・・〉と、私ならこうした方がいいんじゃないかと思って。
オホホホ・・・』と言ったので、
坊さんは〈来てみれば・・・〉と〈打ちみれば・・・〉と直してみたら、これは一段と良い。

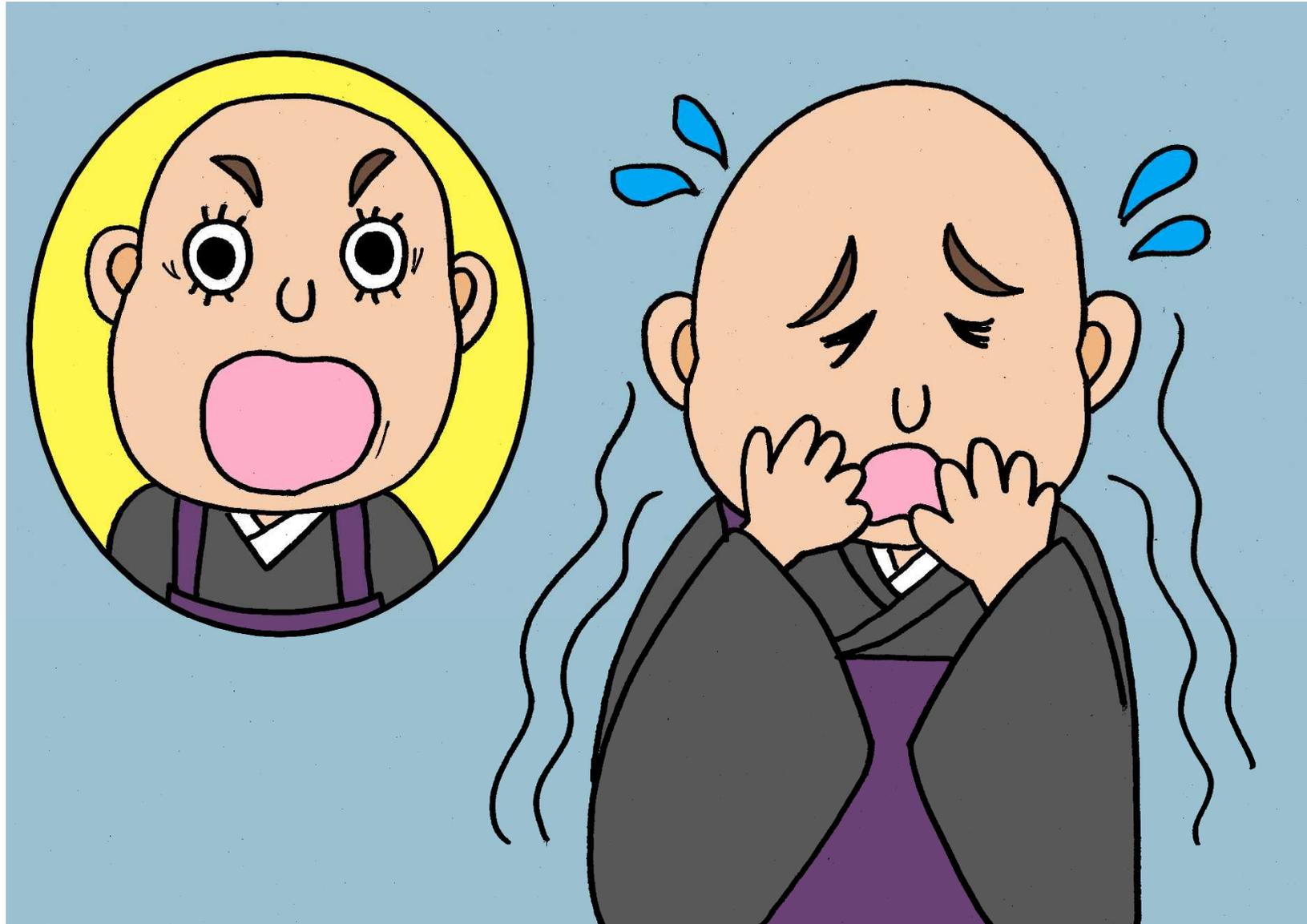


すると、女の子も『お爺ちゃんとお婆ちゃんが直したんだけど、私にも一言直させてください』と言いました。

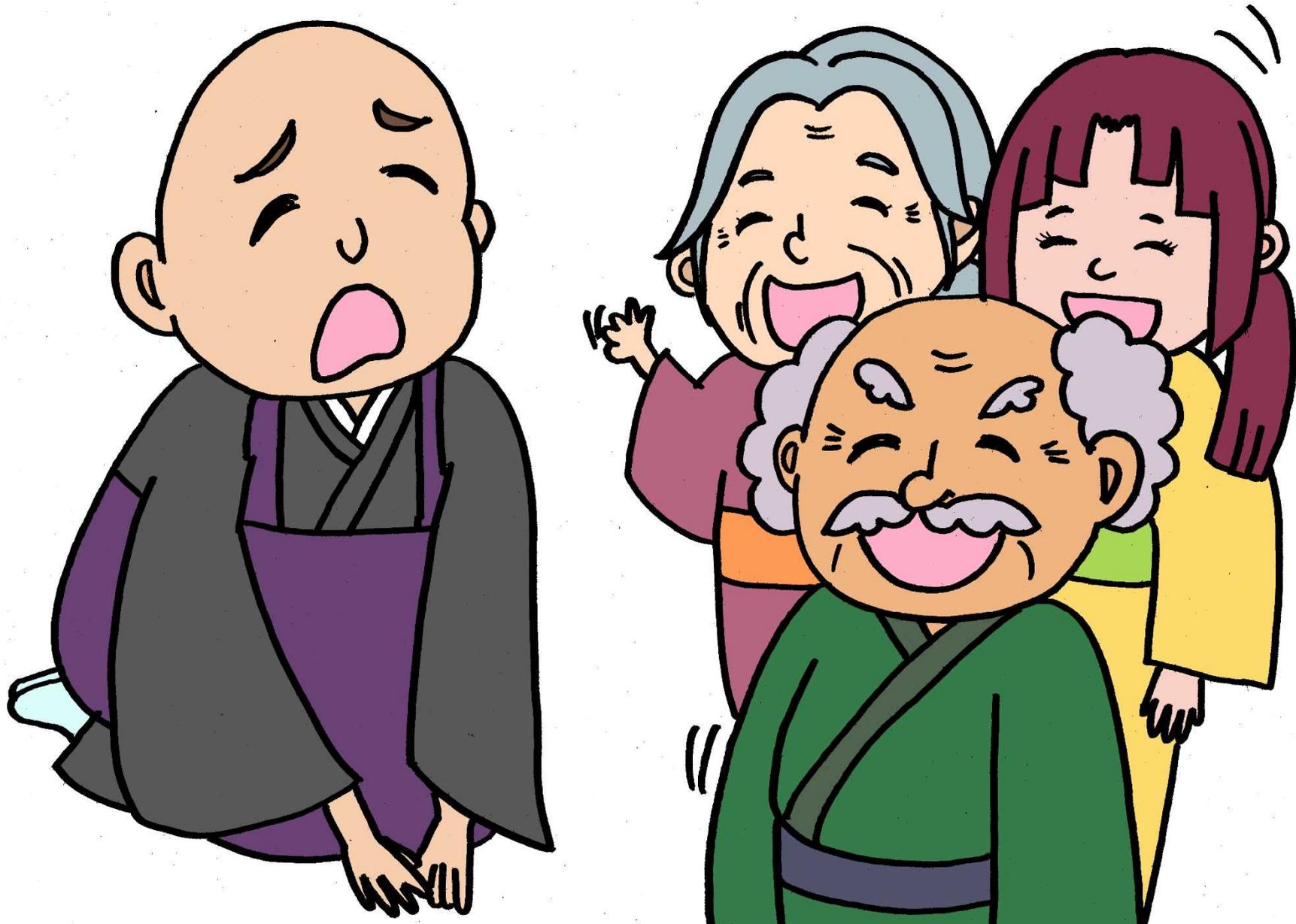
坊さんは、今までは自分より年上の人たちから直されたのなら素直に聞けたけど、今度はこんな小さい小娘に直させてくださいと言われて、ムツとなり、『どこを直すの?』と言うと、娘は『〈岸边に匂う・・・〉のそこだけど、鼓は皮を張っているものだから、皮と川をかけ言葉にして、〈川辺に匂うタンポポの花〉、こうするとどうかなあ?』



坊さんは、なるほどと思って、元の歌の
〈伝え聞く鼓の瀧へ来てみれば岸边に匂うタンポポの花〉を
〈音に聞く鼓の瀧を打ち見れば川辺に匂うタンポポの花〉と詠み直しました。
すると、後の歌の方がいいものなので、驚くやら恥ずかしいやら。まだまだ修行が足りないと
思って、正座をして、三人の方に手を合わせて



『私はまだまだ未熟ものでした。けれど、こんな北国の山奥に住まれていて、これほど見事に歌を直してくださる皆様は、一体何者なののでしょうか？よもや、ただの木こりや狩人ではありませんよね？どうかお名前をお聞かせください』と言うと、三人は顔を合わせてケタケタ笑って、そのままスーッと消えて見えなくなっていました。

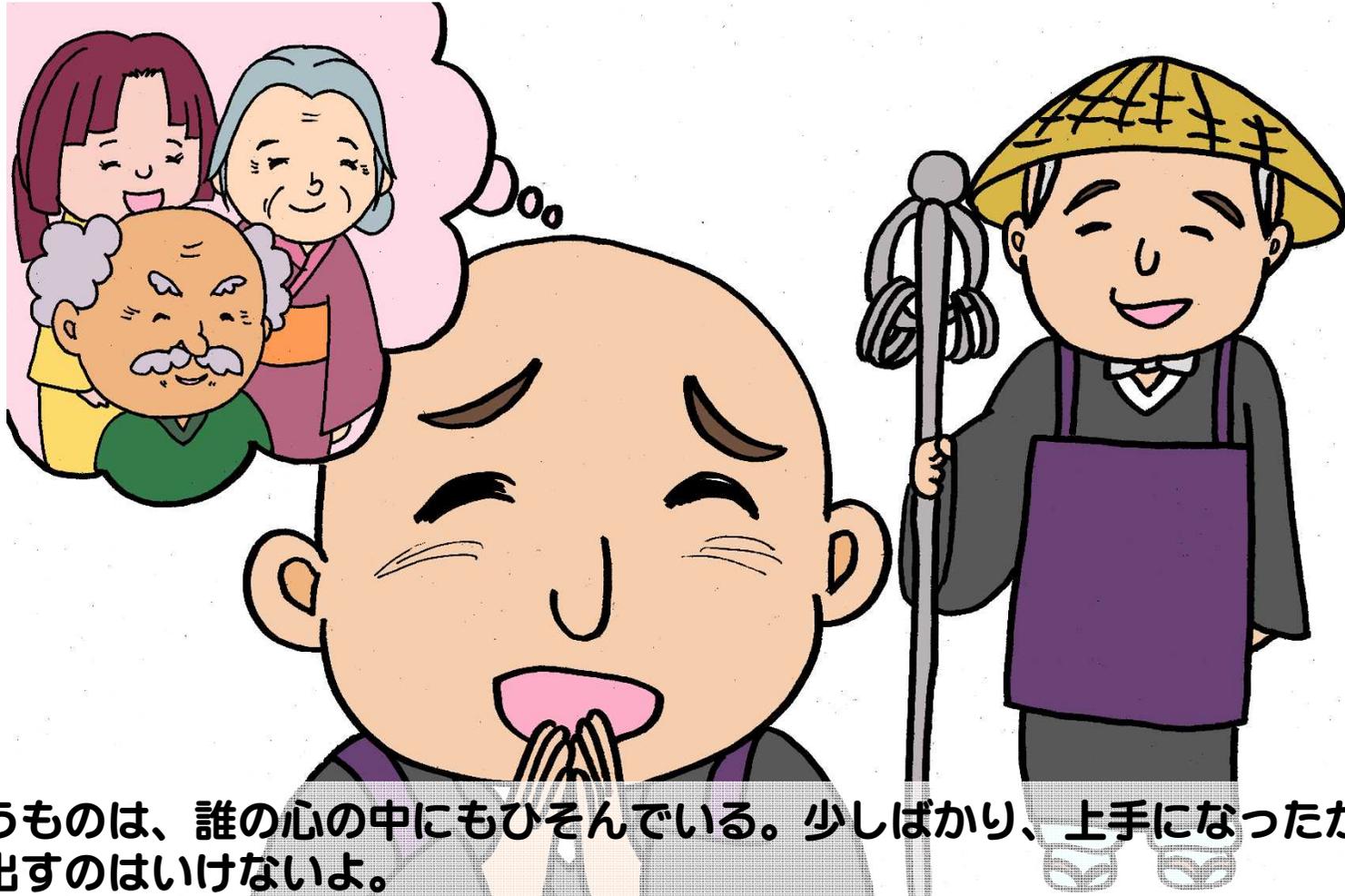


坊さんは、驚いて『あの、もしもし、もしもーし』と叫びました。そこでパッと目が覚めました。

気付いたら、あの瀧のそばで、岩によりかかって寝ていました。あれは夢でした。



坊さんは『これは、私自身が、少しばかり歌が上手だと思って、慢心しかかっていたのを、あの三人の和歌の仙人が夢に出てきて、私の慢心をいましてくれたのだろう』と思って、それからまた、旅を続けながら、いっそう修行に励みました。後に西行法師と呼ばれる立派な歌詠みになったそう。



慢心というものは、誰の心の中にもひそんでいる。少しばかり、上手になったからといって、慢心を外に出すのはいけないよ。

うぬぼれる心をギュッとおさえて、物事に励めば、そのうちきっと、人から認められる、優れた人間になる事ができる。

少しばかり上手なことを鼻にかけて、それ以上努力をしなければ、その人の進歩はそこで終わるよ。

おしまい。